１）講習会・講演会等の開催

国広潮里[1]・板井英伸[1]・山本広美[1]

キーワード：一般向け　専門家向け　企画展　美ら島・美ら海こども工作室　美ら島自然学校　子ども　親子

１．はじめに

当財団では、亜熱帯性動植物に関する調査研究や公共施設の管理をする中で蓄積されたノウハウ、研究成果等を社会に広く発信し、多くの方々に亜熱帯性動植物に関する学習の機会を提供する普及啓発事業として、子どもから大人までを対象にした各種教室等を実施している。これは、一般市民を対象とした講演会だけではなく、研究・調査機関などの業務に携わる社会人や大学生等を主な対象とした、専門的（学術的）な内容・学びの機会として専門家講習会も含まれる。以下に令和４年度の実施状況を報告する。

２．実施結果

１）一般向け及び専門家向け講習会・講演会等

（1）企画展「さがそう！自由研究のタネ」

概要：沖縄の小中学生が取り組む夏休みの自由研究に関連づけた展示を行うことで、学習を補助することを目的とした。併せて、財団が行う調査研究等の取り組みを紹介し、県民への周知を図った。

講師：総合研究センター職員

実施日：令和４年７月 20 日（水）～7 月 24 日（日）

実施場所：沖縄県立博物館・美術館
県民ギャラリー

県内の小中学生を中心に、4 日間で延べ 1,901 名が来場した。会場内では、展示パネルの前で解説にあたる専門家に対し、熱心に質問している来場者の姿が見受けられた。

写真-1「さがそう！自由研究のタネ」会場内の様子

（2）企画展およびシンポジウム

企画展「ハジチとタトゥー　～復興か？創造か？～」

概要：沖縄や奄美等各地のハジチを原寸大の腕模型に施した再現模型や、タヒチと沖縄の過去及び現代のタトゥー写真を展示した。

実施日：令和４年８月７日（日）～8 月 28 日（日）

シンポジウム「ハジチとタトゥー」

概要：琉球弧のハジチとタヒチのタトゥーの歴史概説や現状の問題点を中心に将来について議論した。（参加者 34 名）

実施日：令和４年８月 21 日

実施場所：海洋博公園　海洋文化館

講師：桑原牧子 氏（金城学院大学）
山本芳美 氏（都留文科大学）

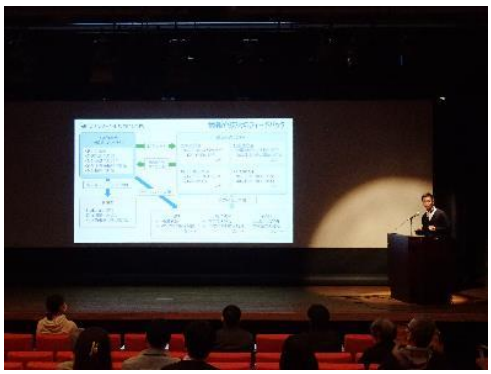
写真-2 シンポジウム「ハジチとタトゥー」

[1] 普及開発課

(3) 講演会「琉球・沖縄の船　−船と航海術−」
概要：太平洋における人類拡散を可能にした天文知識を利用したポリネシアの伝統航海術とその習得方法および関連する伝承について、沖縄の事例と比較しつつ、スライドを用いて解説した。(参加者 16 名)。
講師：板井英伸（普及開発課）
実施日：12 月 4 日（日）
実施場所：海洋博公園　海洋文化館

写真−3 講演会「琉球・沖縄の船　−船と航海術−」

(4) 総合研究センター定期講演会　美ら島再発見
～動物、植物、琉球文化から迫る～
概要：沖縄美ら島財団総合研究センターの職員が沖縄の希少な動植物の保全、文化財保全・復元など、社会的ニーズを踏まえた様々な研究成果について発表した。(参加者 75 名)
実施日：令和 5 年 1 月 9 日
開催場所：沖縄県立博物館・美術館 3F 講堂
発表者：鶴田 大（琉球文化財研究室）
タイトル：「琉球伝統建築のための人材育成事業」
発表者：徳武浩司（普及開発課）
タイトル：「海洋博公園における生物観察会」
発表者：砂川春樹（植物研究室）
タイトル：「中城村におけるシマニンジン生産振興」
発表者：松本瑠偉（動物研究室）
タイトル:「沖縄美ら海水族館における大型板鰓類の研究」



写真−4　総合研究センター定期講演会

２）親子、子どもを対象にした各種教室

(1) 美ら島自然学校学習会
美ら海自然教室では、海の自然環境の不思議や面白さを伝えることを目的に、屋内観察や野外観察などの体験を通した学習会を行った。
令和 4 年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止対策を取りながら開催し、「ウミガメと沖縄の砂浜」に 6 名、ウミガメの産卵調査体験「ウミガメ産卵しちょんどー！（連続講座)」(写真−5) に 17 名の参加があった。産卵調査体験の参加者から、「学習会後に海岸に行き、ウミガメの足跡を見つけられた」と連絡があった。このことから、野生の生物の魅力が伝えられたと考えられた。

写真−5「ウミガメ卵しちょんどー！」

(2) 美ら島・美ら海こども工作室
美ら島・美ら海こども工作室は、主に親子を対象とし、沖縄で採集できる、動物や植物由来の材料・日常生活用品の廃材等を用いて、様々な玩具等を工作する事業である。作製過程で動植物や自然環境の豊かさと活用法を学び、創造性を養うことを目的としている。
令和 4 年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止対策を取りながら、「こども凧カーブヤー作り」（写真−6）を開催し、14 名の参加があった。参加者の中には凧作りが初めてである小学校低学年の子どもも見られ、なかなか凧が揚がらずに苦戦していたが、次第にコツを掴んで揚がるようになり、最後には、「帰ってからも凧揚げをしたい。」と言っていた。このことから、凧という馴染みがなかった遊びが、現代でも楽しめるものであると次世代に伝えられたと考えられた。
また、これまで「琉球玩具への招待」におけるテキストとして普及啓発用冊子を 2 種類作成しているが、本年度は新たに 1 種類を発刊した。

写真−6「こども凧カーブヤー作り」

３．今後の展望

今後も、当財団職員が中心となって講師を務めるほか、生き物の生態観察や実験、顕微鏡を使った観察や野外観察、工作などの体験を交えた各種教室を企画・実施する。気づきのきっかけとなるような五感で体験できる小学生以上の子ども向け講座など、参加者のニーズに合った内容を検討し、学びの機会を提供する。

４．外部評価委員会コメント

一般向けについては、子どもから大人まで、幅広い年代・知識層の方に対し、沖縄の動植物や歴史文化の魅力、財団が行う調査研究成果などの情報を広く、野外観察や実験等の体験を含めて、学ぶ機会を提供する社会貢献の高い事業である。内容の充実とともに今後の発展を期待する。

専門家向けについては、多くの参加者を対象とし、沖縄の環境や動植物、琉球文化についての講演会や講習会を開催しており、社会貢献性が高い。

今後とも内容の充実と発展を期待する。(池田顧問：琉球大学名誉教授)

[1] 普及開発課